

全員現場主義

ちよいワル風味の双子ちゃん

やっぱり、おまえよりオレのほうがカッコイイと思ってるんですか? ときたら、「お互いにそう思ってるんじゃないの」と、シャツの襟元からネックレスを覗かせたトミーが言った。「でも、きょうのこの衣装、どっちもオレのなんよね」と、首にストールを巻いたタミーが切り返した。

1967年3月6日の午前9時と午前9時半、トミー＝株式会社昭栄精機代表取締役社長・樋口智朗とタミー＝同社専務取締役兼最高財務責任者・樋口達朗は一卵性双生児として生まれた。

高校時代、兄が参加したバンドが琵琶湖で合宿しようということになった。で、バンド名は“琵琶湖バンド”ということに。だが、「ヘビメタやるのに、そりゃなからう」と、バンドの名称は“リュートレイク”に変更。つまりは琵琶=luteと湖=lakeを組み合わせた和製英語である。

ドラマーだった智朗もトミーとあいなった。

他の高校で野球に励んでいた弟の達朗も、兄に感化されロックバンドのボーカル、タミーとして文化祭のステージに立った。

「兄弟げんかしたのは小2くらいまで」という仲のよい双子である。では、兄弟タッグで、ずいぶん暴れたのでは? という質問には、

「よく言われるんだけど、そんなのまったくなかった」とのこと。子どもの頃からふたりともからだが大きくて、自然とまわりが敬遠していたようだ。中学2年で身長は175センチに達したという。

「もともと、そこで成長が止まっちゃったんだけど」とタミーが言うと、「成長するのは横ばっかり。面白いもので、どっちかが肥ってくると、いっしょに肥りだすんだよね」とトミーが笑う。

強面のふたりがコンビニへ行くと、入口にたむろするヤンチャな面々がきれいに花道をつくってくれる。「そこをビビりながら通っていく(笑)」と、トミーとタミー。



株式会社昭栄精機 / 代表取締役社長

樋口 智朗

ひぐち ともお

専務取締役兼最高財務責任者

樋口 達朗

ひぐち たつお

次ページへつづく



稼ぐ人間が多いほうが効率がいい

怖かった父

「おまえら毎日が修学旅行みたいなもんだろ」と言われる小学生時代だった。なにしろ学校の友だちが兄弟なわけだから。

4年生の時だった、なんでも「ひとといっしょのことはいや」な、タミーが、生徒会の会長に立候補した。生徒会長といえばふう最上級生の6年生が務めるものである。型破りな行動に出た弟への対抗心からタミーも出馬。

選挙結果は、80票を得たタミーに対して、40票も得られなかったタミーは最下位。もともと当選した6年生候補は300票以上を得ていた。ふたりそろっての落選である。

時にこうした思い切った行動には出るものの、兄弟はいわゆる悪ガキではなかった。そこには、圧倒的な父の存在があったから。

機械加工会社、昭栄精機の創業者・樋口宗男さんは、兄弟にとって相当に怖い父親だったようだ。なにかコトを起せば鉄拳制裁が待っている。

「オヤジ」なんて、口に出して言えなかった。もう「お父さん」で呼んでた」とふたり。

宗男さんは、「ひとに迷惑をかけるな」「挨拶はきちんとしろ」といったことにはうるさかったが、勉強しろとはいっさい言わなかった。兄弟はガリ勉ではないが、成績は悪いほうではなかった。とくにタミーは、学力テストで常に上位につけていた。

スポーツにも打ち込んだ。中学も、兄弟ともに地元の公立校に進み、ふたりとも水泳部に所属。多くの大会でメダルを得た。

いわば校内では有名人だった双子の胸のなかに、敗者復活戦ともいえる思いがわき上がる。生徒会選挙への再挑戦だ。しかし、そこは小学校時代の苦い敗戦がある。「やっぱり、会長は無理とちゃうか?」と話し合い、書記会計というちょっと地味な役職にタミーが立候補することとなった。「ま、そこは石橋を叩いて渡るっていう、いまの会社経営にも通じる部分」とどこまで本気か冗談かわからない顔でタミーが言う。

さて、こんどの選挙結果だが、タミーは見事に書記会計委員に当選!

やっぱり会長に立候補したほうがよかったですのでは? と言ってみたら、「いや、オレは石橋を叩いて、それでも渡らずにもどってくるほうだから」とタミー。そこに根強くある慎重さはなにかを問うと、「父がイケイケの経営方針だったからかな。バブルを謳歌し、バブル崩壊を知らずに逝ったひとだからね」そんな猪突猛進な父を反面教師とし、兄弟は慎重派に育っていく。

取締役営業見習い

タミーが教育大学付属高校に進学したのは、当時人気のあった学園ドラマ『ただいま放課後』や金八先生ブームの影響で、教師を志望したところがあったからかもしれない。世はツツパリ全盛だったが、「そちらのほうにいかないで、先生になろうかなと思うのがオレ」とタミー。

「でもオレたちは、しっかりそういうワル連中とも仲良くしてた。そういうバランス感覚って、

いまの経営に生きてるかも」とタミー。

アメリカンハードロック、ヘビーメタルが一世を風靡、そのムーブメントのなかでバンド活動に熱中するタミーは、高価なドラムセットを購入する。父の工場アルバイトすることでその金を得たのだった。ドーナツ状の金属板にホブ盤という機械で歯切りする作業は、一日じゅう立ちっぱなしで足がぼんぼんに張り、手は油でかぶれた。欲しい物を手に入れるための仕事ではあったが、反面、父にうまく乗せられて現場仕事をおぼえさせられているようにも感じるタミーだった。

一方、県立高校に進学したタミーは野球部に入り、朝6時に始まって放課後夜9時に終わる練習に明け暮れる毎日。高校生らしい情報ルートとはいえばタミーを介したのしかなく、必然的に兄の趣味の影響を受け音楽に傾倒してゆく。白のストラトキャスター(エレキギター)を購入するも、2週間で挫折。それでもバンドをやりたい彼は、高校3年の野球部引退後、たのきんトリオで人気を博した野村義男率いるTHE GOOD-BYEのコピーバンドのボーカルとなった。小学校の頃、兄弟デュオで合唱会の舞台に立つなどは好きだったし自信があるのだ。

大学4年の冬、福島県郡山の大学に通っていたタミーは、実家からの連絡で急ぎ帰省する。待っていたのは、肺がんに侵された宗男さんの10か月の余命宣告だった。

そして、「わざとじゃないかと思うくらい」(タミー)きっちり10か月の後、頑固者の宗男さんは亡くなった。

在学中、跡を継ぐかどうか迷っていたタミーも、地元の大学に通いながら家業の手伝いをして小遣いを稼ぎ、社用車である白のNEWソアラ(当時“女子大生ホイホイ”といわれていたナンパアイテム)を転がしながらウチの仕事をするのもいいかもしれないと安易に考えていたタミーも、もはや猶予はなかった。卒業後は、父の斡旋で修行のため2~3年勤める予定だった大手メーカーを半年で辞め、ふたりそろって昭栄精機に入社。二代目社長である宗男さんの実弟、国昭さんから渡された名刺の名前の横には〔取締役営業見習い〕と刷られていた。ミョ〜な肩書がなぜかキャッチーで、営業に行くとき老若男女を問わず温かく受け入れられた。スポーツもバンドもモチベーションのためにやってきたことだった。いま、モチベーションのために、自分たちはこれをやるしかないのだ。

Shoei's DNA

宗男さんは、設備投資のために莫大な借入れをしていた。堅実路線の国昭さんは、それを着実に返済しつつ、反面、兄弟に現場の裁量を任せてくれた。「天国の父が引いてくれたレール」(タミー)によって、受注もうまくいっていた。

しかし、バブル崩壊後の95年とITバブル崩壊後の02年には発注が海外に流れ、まったく仕事なくなった。そのたびに負けてたまるかという思いで歯を食いしばった。タミーもタミーも結婚し、これから子どもに金がかかると時期だったし、なにより従業員らを路頭に

迷わせるわけにはいかなかった。兄弟ふたりでプレッシャーも分散できたかもしれない。

「オヤジ、いや、お父さん(笑)の会社を潰すわけにはいかない」とふたりは声をそろえて言う。そして、「父のつくった会社を大きくしようというつもりもない」とつづけた。なぜかときどき、「なんかスゴイ職人さんや老舗の割烹の女将や板さんが、人を増やすと味や技を維持できないとか言いますよね? カッコいいじゃないですか。あんなイメージ(笑)」

黒いキャップとポロシャツの胸には〔Shoei's DNA〕と刺繍されている。「送り出す製品も、自分自身の行動にも昭栄ブランドという誇りを持って」とタミーは言う。

04年にふたりが現職について以来、変わらぬ誓いがある。それは、全員現場主義であ

る。事務職も、配送員も、むろん経営者もすべてが現場で汗する。「だって、金を稼ぐ人間が多いほうが効率がいいよね」と言って、タミーとタミーは撮影の合間にもプラ箱に入った製品を運んでいた。

(取材・文=上野 歩)



ポロシャツの刺繍



主力の産業用サーボのシャフト



産業機器、印刷機、精米機、医療機器等の機械加工部品を製造

Company Profile

◆会社名 株式会社 昭栄精機
◆所在地 愛知県大府市横根町坊主山 1-446
◆TEL / FAX TEL : 0562-48-0918
FAX : 0562-48-5878
◆設立 1963年3月
◆資本金 1,000万円
◆従業員数 15人
◆事業内容 材料~完成まで機械加工部品をロットの大小問わず、低価格、短納期、高品質でお届けします。

◆主要三品目
・シャフト
・スプラインや歯車
・円筒カム
◆注文・製品に関するお問合せ
担当: 樋口智朗 TEL : 0562-48-0918

エミダス会員番号 : 72087